



修学旅行最終号

終わりはいつも・・・



「あ～、疲れた。」

バスの席に座るとＹ衣さんが声を漏らした。

たしかに、昨日の重いバッグを担いで清水寺の駐車場からホテルまでの徒歩移動はきつかった。でもですね、その時は考えていなかったけれど、いやもしかしたら気づかないふりをしてむりやり意識の下層におしこんでいたのかもしれないけれど、まあ、要するにですね、あれです、駐車場からホテルまでの昨日の地理的状况を考察するに、一言で言えば、ずっと下り坂だったということです。

と、いうことはですよ、今日のホテルから駐車場への道のりはその反対、必然としてずっと上り坂になるわけでして・・・
重いバッグを持ってですね・・・

——— Ｙ衣さんに呼応するように後ろの座席の〇愛さんがドスンとバッグを下ろ

した。そして心情を吐露するように「ふ～」と大きく息をはいた。それを合図に運転手さんはアクセルを踏み、バスは本日最初の目的地、二条城へ向かった。

二条城の見学通路に入るとすぐ、Ｋ音さんが妙な動きを見せた。まるで何かを試すように、廊下の右端や左端を歩いたかと思えば、同じ場所ですくっと回ったりしている。通路のあちこちに“二条城”とプリントされたポロシャツを着た係の人が何かないと厳しい眼差しで立っているのだが、Ｋ音さんの行動を見て、廊下の突きあたりに立っている係の女性の視線が一瞬和らいた。

そう、Ｋ音さんは、まさに試していたのだ。

歩を進めるたびに「ぎゅっ、ぎゅっ。」となる床の音。うぐいす張り。

それを確認し、Ｋ音さんはニコッと笑った。

係の女性も、楚々と笑った。



金閣を見学し、その後京都太秦映画村についた途端、子ども達のテンションは“地下100メートルから京都タワーのてっぺんまで跳ね上がった”ように感じた。

そのように感じる自分に、“よしよし、今日はいいんじゃない”とひそかにうなずきつつ、何百人もの修学旅行生と一緒に昼食のカレーを食べた。

昼食を食べると子ども達は、飛び出していった。お目当てのアトラクションがあるようで、全員そろって一目散に2階のその場所に向かった。その後も思い思いにアトラクションや買い物を楽しみ、映画村を満喫しているのであった。

残り時間もわずかになったところで、女の子達はお化け屋敷に挑んだ。男子は何をしているのかと見ると、木陰に寄り集まり

ぐったりと座りこんで少し淀んだ空気感を醸し出していた。

そういえばH太くんは二条城の高台で休憩していた時、「はい、休憩終わり。」というN司先生に「せっかく景色がいいので、もうちょっと眺めを楽しみましょう。」と、少し疲れた声で話していたような気がする。

そういえばS太くんは、さっきアトラクション代を払うときに名残惜しそうに財布からお金を取り出していたが、とうとうお小遣いが底をつきアトラクションもお土産も手が出ない状態らしい。

そういえばK達くんは、……うむ、何も心当たりはない。しかし、もしかしてこの修学旅行の間、大好きなラーメンを食べていないことが彼の肉体に……まあそこは、あくまでも想像の域を出ないのである。

映画村をこれでもかと堪能し尽くし、帰路のバスに乗り込んだ。

帰りのバスの中は恒例のビデオ鑑賞である。子ども達は、食い入るように見入る者、疲れて目を閉じている者、思い思いに修学旅行の幕を閉じようとしている。画面に映る、ねことねずみが織りなすコメディタッチのビデオを見つつ、そう言えば去年の広島も一昨年の高知も、帰りのバスの中で同じビデオを見たような気がした。デジャブのように記憶が蘇る。

——— 修学旅行は、いつも“永平寺”で始まり、“〇ムと〇エリー”で終わるのであった。